NEXT CONCERTS
〉〉次回東京定期演奏会

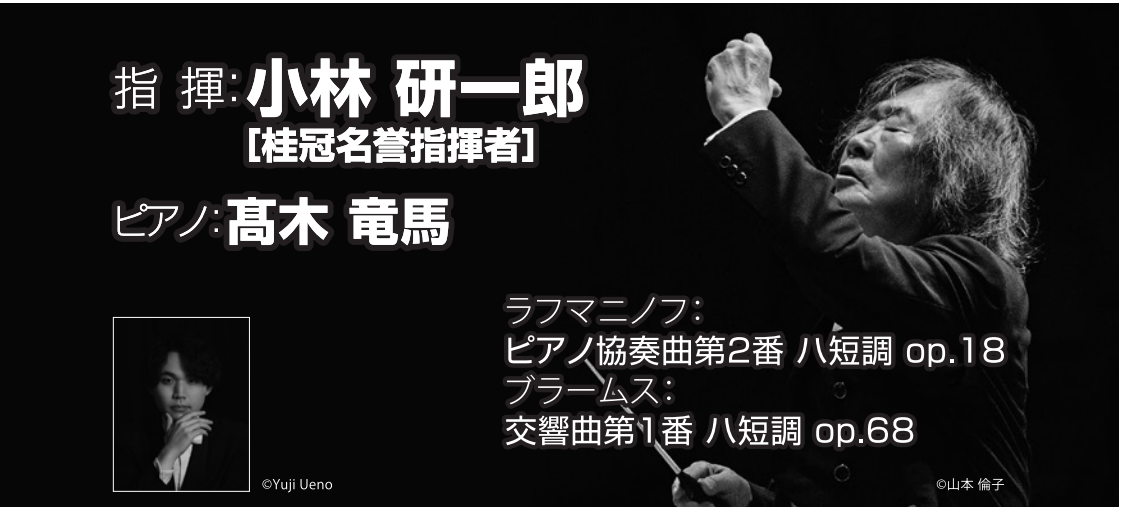
第764回

サントリーホール

2024年10月18日(金)19:00開演　プレトーク　齋藤 弘美氏 18:30〜

19日(土)14:00開演　13:20〜

炎のコバケンと俊英 髙木竜馬が導く ロマン派一直線



1回券料金　全席種残席僅少	S ¥8,500　A ¥7,000　B ¥6,000　C ¥5,000　P ¥4,500 Ys（25歳以下）¥2,000

※障害者手帳をお持ちの方は割引きがございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー！

小林 研一郎 編

きき手　伊熊 よし子

「ブラームスでは、常識を超えた新しい世界へと聴衆を導いていきたいのです」

マエストロ小林研一郎にとって、2024年は特別な意味合いを備えた年である。1974年の第1回ブダペスト国際指揮者コンクールにおいて、優勝の栄冠に輝いてからちょうど50年のメモリアルイヤーを迎えるからである。この間、コバケンさんは国内外のオーケストラの主要なポストを歴任し、50年間にわたり、多種多様な作品をさまざまなオーケストラと演奏してきた。そんな彼が日本フィルハーモニー交響楽団の東京定期演奏会で、ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番とブラームスの交響曲第1番というプログラムを披露する。その選曲についてお話を伺った。

「ブラームスの交響曲第1番は、忘れえぬ思い出のある曲です。ブダペストのコンクール後、ハンガリー国立交響楽団(現・ハンガリー国立フィル)の常任指揮者に就任し、初めてこのブラームスの交響曲第1番のリハーサルをしていたときのことです。限られた人がリハを聴いていたのですが、その人たちが"小林が振っていると、何倍も音が違うけど、弦楽器の弓を新しく変えたのか?"と聞いたのです。オーケストラは"いや、まったく変えていない、いつもと同じ。彼が振ると私たちがいままでどんなに演奏してもそういう音にならなかったのに、小林が棒を下ろした途端自分たちが目指している響きが自然に出でくるんだ"といったのです。僕はそのとき、この交響曲に対して確信を抱きました。それまで何度も指揮してきましたが、なかなか確信に触れることができなかった。それがこのときに"ああ、ようやく確信に向かって走っている"という思いを抱いた。その思いは忘れられません」

ブラームスはベートーヴェンを深く敬愛するあまり、なかなか交響曲を生み出すことができず、着想から完成まで21年を要している。

「第1楽章はもがいてもがいて、旋律と対旋律が出てくるまでの苦心が感じられます。やがて宗教心が芽生え、ベートーヴェンから精神的に解き放たれ、自身のバイブルへと移行していく。僕は展開部の終わりの部分の弦楽器のレガートを変更するようにしています。ひとつひとつの音をセパレートして弾く。通常は弓の真ん中を使って弾くのですが、そうではなく、弓をたたき付けるように弾いてもらう。コントラバスもピチカートで。そうすると新たな世界が見えてくるのです」

今回はこの部分に耳を開いて、心が高揚するような、新たな世界を存分に味わいたい。

「第2楽章は、興奮せずにあくまでも弱音で。ヴァイオリンやホルンのソロも、哀しく閉ざされた世界を表現して、といいます。もちろんお願いする形でね(笑)。でも、そのうちに確信に触れる響きが出てくるようになるのです」

第3楽章に関しても特有の表現が飛び出す。

「この楽章はテンポが難しい。そよ吹く風が髪をとかしていくような、静かに眠りに落ちていくような、肌にまつわりつくような感覚。1カ所だけ1分30秒ほど、ハンガリー舞曲が出てくるのですが、これぞブラームスです!」

そして、終楽章へと突入する。

「第4楽章は、ベートーヴェンに似た音でも、テーマに入るとすでにブラームスの独壇場。最後は高らかにうたい上げ、全楽器が炸裂し、ティンパニなど心をえぐるような音が出てきます。僕はここで常識を超えた、新しい世界へと聴衆を導いていきたいのです」

今回は、その前にラフマニノフのピアノ協奏曲第2番が登場する。

「ラフマニノフは地底を這うような思いで、このコンチェルトを作曲しています。アメリカに呼んでもらい、人々の心に独特な世界を染み込ませようとした。髙木竜馬さんとは7か月前に共演し、同じ曲で共演します。きっとより濃密な音の対話が生まれるでしょう」

助成：
文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan